

多摩川の名脇役

多摩川河口域の変化を見つめる

2. 「六郷水門」 (東京都大田区南六郷2)

多摩川の河口から4kmほどの左岸にある六郷水門。現在その役割をはたす事はほとんどありませんが、多摩川河口付近のシンボルとして、また改修工事の歴史をしのばせる存在として、しっかりと腰をすえてたたずんでいます。



(左から時計回りに)

多摩川からみた六郷水門(H15撮影)／付近のヨシの群落と干潟／河川敷道路からみた水門／「六郷水門 昭和6年3月成」／水路からみた水門



六郷水門は、「六郷用水^{*1}」の排水口に位置します。

六郷用水は、別名"次大夫堀（じだゆうぼり）"ともよばれ、多摩川の治水奉行 小泉次大夫吉次（こいずみじだゆうよしつぐ）によって慶長2(1597)年から15年の歳月をかけて開削された農業用の水路です。

多摩川の約24km付近（現在の狛江市和泉）から取水し、当時の世田谷領（現在の狛江市・世田谷区・大田区の一部）・六郷領（現在の大田区）を全長約30kmにわたり流れていました。

田畑をうるおしながら流域の雑排水を多摩川へ排出する役割をはたすとともに、肥料や雑貨類の舟運にも利用されていたそうです。

昭和に入ると六郷地区の人口が急速に増え、生活排水が増えました。

田畑も減少し、用水路へ直接流れ込む水量が増え、大雨の時などに多摩川へ排出しきれずに浸水する地域が広がりました。

また多摩川の水位が上がると、川の水が六郷用水へ逆流してしまうといった被害も多かったため、排水口を広げ、必要に応じて多摩川と六郷用水を遮断することができる水門建設の必要性が強まりました。



六郷水門の工事は、昭和5(1930)年1月から翌年3月にかけて、「多摩川改修工事（大正7:1918年～昭和8:1933年まで）」の一環として行われました。

設計者は、ドイツ人の神智学者シュタイナーではないかとも言われていますが、残念ながら特定する資料は残っていません。

側面の壁には、当時の内務省多摩川改修事務所長であった金森誠之（かなもり しげゆき）氏が考案した"金森式鉄筋レンガ"が初めて使われ、新技術の投入としても脚光をあびました。

金森氏が所長をつとめた「河川改修事務所」とは現在の「京浜河川事務所」の前身で、河川改修工事の着手によって現在の川崎市幸区に「御幸土地収用事務所」を設置、以後名前をかえながら大正9(1920)年に「多摩川改修事務所」と改められたものです。

金森氏は関東大震災（大正12:1923年）前後に事務所長を勤めており、この"金森式鉄筋レンガ"をはじめ色々な新しい工法を考案したり、多摩川を主題にした映画をつくり自ら出演したりと、なかなかユニークな人物だったようです。（新多摩川誌より）

高度成長期にはいり更に六郷地区の人口が増加すると、この水門からの自然排水だけでは対応しきれなくなり、昭和47(1972)年3月、新たにポンプの圧力によって強制的に排水できる施設（六郷ポンプ所排水樋管）が東京都下水道局によって設置されました。



また下水道の整備もすすみ、六郷水門はその機能を保ちつつもほとんど使われる事はなくなりました。

しかし、赤レンガ造りの懐かしさと重厚さが入り交じった外観でそこに腰をすえ、完成から70年以上たった今も多摩川をじっと見つめています。

*1 「六郷用水」についてはこのシリーズ第6回で詳しくお伝えいたします。